THE ART OF CHARLES SCHULZのシュルツさんの奥さんの『INTRODUCTION』を訳してみました。
読んだまま急いで訳したので，激しく意訳ですが，なにかのお役にたてれば嬉しいです。

INTRODUCTION
p16

「スパーキーは天才。」

「なぜアイディアをおもいついたんですか？」「どうやって，アイディアを考えるんですか？」
たくさんの人々がチャールズシュルツに対して，この難しい質問をしました。この質問への私なりの答えはこれなのです。
チャールズシュルツが天才だということは，最初に知り合った時に分かりました。そして，その後２５年間に渡って，他の人と同じように同じこの質問を彼にぶつけて，過ごしてきたのです。そして，結局，「彼は天才」という，この答えに行き着いていくのです。
彼の天才的な才能は数値で表したり，説明したりすることができないのです。私たちはそこから生み出されるものを，ただ楽しむことができるだけです。
私たちのような彼の周りの人々が，この「なぜ」「どうやって」という問題を解明したり，答えを得ようと努力したりしました。
しかし，スパーキー自身ほどこの質問の答を得ようと努力した人はいません。

彼は直感的にうまく言葉にして説明できないことだとわかっていたのです。
彼はただ，毎度毎度の「あなたのアイディアはどこから湧いてくるのですか？」という質問には触れないようにするだけでした。

スパーキーのアイディアの源は生活の中にあります。
彼のアイディアの源は私たちがよく知っていていること，つまり私たち家族に関わりのあることなのです。
彼の天才的なひらめきをもって日常の中から拾い集めたものや，私たち家族を描いたりした魅力的なアイディアを，スパーキーは紆余曲折しながら漫画のコマのなかに押し込めていくのです。

天才と呼ばれる人はたくさんいることでしょう。でも時代とマッチするという幸運に恵まれた天才は数少ないと思います。
１千年前ならば，スパーキーは，言い伝えをまとめて，そして何世代も語り継ぐ一族の一人だったことでしょう。
人間真理が含まれ，聞く人々が時の応じて自由に解釈することのできる物語の価値を，彼は直感的に知っています。
最も良い物語は，新しい聞き手によって新たに解釈され，繰り返し語られるのです。

スパーキーは小さかった頃，ビッグリトルブックが好きでした。
高校生の頃には，シャーロック・ホームズ の世界にはまっていました。
そして常に彼は冒険漫画が好きでした。彼は本当に冒険漫画を描きたかったのです。
しかし漫画編集者の注目を集めたのは，小さい子どもの目を通して人の心を描くという，無垢で深淵な方法でした。
そして，彼は子ども達を描くようになったのです。

---

p17

子供たちは大人達を簡単にしたもの，まだ『おなべのふたが閉まっているようなもの』と彼は言っています。
彼は，人間は遺伝子からできていて，子ども時代には，私たちの個性は出番を待って，中でぐつぐつと煮込まれているに違いないと信じています。
だからこそ，ピーナッツ最初のストリップのうらやましさとやっかみが入り交じった

「おなじみチャーリーブラウン。ぼくあいつ大嫌い」
と言うセリフが登場したのです。
このセリフはションキングでしたが，スパーキーは，子供たちは良くも悪くも，そんな風に感じるとを知っていたのです。
スパーキーは強い個性を持った子供を観察し，子どもが『おなべのふたをはずす時』を見ているのです。

スパーキーは昼食を取りながら，彼のアイス・アリーナで過ごすことが好きでした。
さまざまな楽しいグループとの関わりました。そして彼はファンの前でご機嫌でした。
彼は人々の興味を捕らえる話の描き方を知っていました。
彼の率直さはどんな会話でも活気づけ，そして彼は質問をしては，いろいろな情報を探りました。この様子は聞き手と相互作用しながら物語を作った昔の語り部のようです。

漫画は１千年前の語り部から連なるものです。
読者が読む何週間も前に，漫画家は紙の上に絵と言葉を置いていきます。
直接的に表現しつつ，個性が感じられるように描かなければいけないのです。
２０世紀のアメリカ の漫画家は３０００マイルの向こう側に通じるストーリーを作り出さなくてはなりません。
バーモント州やミシガン州の人々だけでなくハワイの人々も笑わせる雪遊びの場面を描かなければならないのです。

小説家のように、漫画家は自分自身の中にあるものを引き出さなくてはならないのです。それは個人の技能です。

時々スパーキーは彼の漫画が面白いかどうか自信が持てないことがありました。
確かに彼は読者の反応を受け取ることができます。
しかし，それは漫画を描いてから数ヶ月後になってしまいます。これは自然な成り行きではありません。
私は彼のスタジオに留まり，彼の机の上のデイリーコミックの山を時折読みました。
私が大声で笑ったり，彼に私がどれぐらい面白かったと語ったりすると，
『あぁ，君が面白いと言ってくれて嬉しいよ。自信がなかったんだ』
と本当に喜んでくれました。
彼は人々の積極的な反応が好きでした。
しかし，そして同時に，それらを無視しなければなりませんでした。
彼は彼自身が面白かったと思ったものを描き，そして読者が彼と同様に面白いと感じてくれることを願うだけでした。
彼はいつでも読者が彼の描いたキャラクターやストーリーを気に入ってくれることを喜びました。
しかし彼は読者に手紙を書くことができないことを知っていました。
彼は常に彼自身のために描いたのです。

.彼は非常に早い時期から聖書からの引用を使い始めました。
時折,『どうして漫画で宗教的な引用をあえてするか？」と，手紙を書いてくる人がいました。
しかし，彼は聖書の引用を正確に取り扱っていさえいれば，確固とした根拠のもとに彼は満足していました。
一方，７０年代に,『ふくろうが私の名前を呼ぶのを聞いた（I Heard the Owl Call My Name）』というタイトルで漫画を描きました。
しかし，これがアメリカ先住民の神聖なことわざであるという手紙を受け取り，スパーキーは謝罪を書いたのです。
彼は自分が礼儀知らずであったことを認めたのです。

---

p18

スパーキーは時々漫画のアイディアを私や他の人たちに話して試しました。
例えば,
『もしキャンプに行ったチャーリーブラウンが「うるさい　ほっといてくれ」としか言わない子に出会ったらどうなるだろ？』

なんというように。
まあ，ちょっと面白くなさそうな感じですが，私はダメだとは言いませんでした。
なぜなら彼のことをよく知っていたからです。
そしてもちろん，素敵な絵と共に，単発漫画とストーリー漫画を交互に描くという彼の独特の方法で，このアイディアは面白い続き物になりました。
面白いお話のために登場したこの子（新しいキャラクターたち全てについて同様ですが）は，スパーキーが気に入れば，他の年の別のキャンプエピソードで再登場させる可能性もありました。
しかし，それは滅多にあることではありません。
初登場が最後の登場になりました。
彼は漫画のオチをつくるのには薄っぺらすぎると説明していました。

毎日の漫画を作り出すために，彼は自然とアイディアを引き起こしてくれるキャラクターに頼らなければなりませんでした。
スパーキーは常に湧いてきたアイディアを書き留めるためにペンを持っていました。
もし彼が運転中ならば，彼は私にアイディアを書き留めるように頼んできました。
コンサートで交響曲を聞いているときに，私はメモと鉛筆を取り出すために彼がポケットに手を伸ばすのをしばしば目撃しました。
家に帰る途中で，彼は私にそのアイディアを話してくれました。
しかし彼が説明してくれたアイディアは単なるタネでしかすぎません。
そのことは完成した平日版・日曜版の漫画を見ると分かります。
彼のキャラクターたちはそれぞれの個性と特性を持っているので，どんな状況からでもアイディアを思い付くことができました。

キャラクター・シチェーション・登場人物たちのセリフと同じくらい，スパーキーはピーナッツにはまだまだ面白い絵がでてくるということを示してきました。
彼は黄色のメモ帳に変なポーズを取っているキャラクター達のいたずら描きをしていました。
転がっいたり，逆さまに飛んでいたり，などなど。
これらの落書きは彼のアイディアの元になりました。

ピーナッツが終わった時，読者の反応はものすごいものでした。
何千と届いた手紙が証明するように，スパーキーは深く人々に触れ，彼らの人生を変えました。

---

p19
「子どもの頃，時々すごく心配になったりや不安になったりして落ち込みました。私は家に帰ってピーナッツを読むと，気持ちが落ち着き，幸せでさえありました」

「私が１１歳の時に入院しなくてはならなくなりました。とても怖かったのです。面会時間が過ぎ母は帰らなくてはいけませんでしたが，腕の中のスヌーピーのぬいぐるみは私を独りにはしませんでした。私は一晩中抱いていました。」

「私はしばしばチャーリー・ブラウンが，ダメで，どこにいっても独りぼっちであるところに共感しました。そして私の大好きな登場人物は，いつもライナスでした。彼は繊細なのに，神秘的な無垢で想像の能力持っているからです。」

「チャーリー・ブラウン と仲間達は私の精神にやすらぎであり慰めでした。私はいつもこのことをシュルツさんに伝えたかったのです。あなたにお話することができました。」

スパーキーはこう言ったことがあります。
「もし私の墓石に「彼は人々を幸せにした」と書かれたのなら，満足である。」

彼はそれ以上のことをしたのです。

Jean Schulz
ジーン・シュルツ（Jean Schulz）